

□文献紹介□

デュピルマブ治療を受けたアトピー性皮膚炎患者における乾癬発症リスクの増加

デュピルマブはIL-4/IL-13経路を阻害することでTh2炎症を選択的に抑制し、アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)に対して高い有効性を示す。一方で、デュピルマブ治療を受けたAD患者において、乾癬や乾癬性関節炎(psoriatic arthritis: PsA)を発症した症例報告が蓄積しており、Th2炎症の抑制により免疫応答がTh17炎症優位に傾くことで、乾癬が誘発される可能性が示唆されている。しかし、この関連について大規模データを用いて検証した研究は限られていた。

本論文はTriNetXデータベースを用いた後ろ向きコホート解析であり、30日以上の間隔をあけて2回以上ADと診断された18歳以上の患者を対象とした。AD診断後にデュピルマブ治療を開始した患者(デュピルマブ群)と、生物学的製剤を除く全身性ステロイドまたは免疫抑制剤で治療された患者(対照群)を比較し、乾癬およびPsAの発症率を評価した。年齢、性別、人種、併存疾患、検査値などを用いて傾向スコアを算出し、1:1でマッチングした。結果、各群9,860人が解析対象となった。

その結果、乾癬の3年累積発症率はデュピルマブ群

で有意に高値となり(2.86 vs 1.79%, $p < 0.001$)、乾癬発症リスクの増加が認められた(HR 1.58, 95%信頼区間 1.25~1.99)。絶対リスク増加はAD患者94人に対して1人であり(NNH=94)、この傾向はサブグループ解析、感度解析、検証解析でも一貫していた。一方で、PsAについては発症率および発症リスクはいずれも有意差を認めなかった。

本論文により、デュピルマブで治療されたAD患者では、他の全身療法と比較して乾癬発症リスクが相対的に高まることが示された。一方で、絶対リスク増加の臨床的意義は限定的であり、AD治療におけるデュピルマブの有効性が確立している点を踏まえて評価されるべきである。またPsAに関しては診断バイアスの可能性も考慮され、今後更なる検討が必要と考えられる。

Lin TL, et al: Psoriasis risk in patients with atopic dermatitis treated with dupilumab. JAMA Dermatol 161:813-821, 2025

(慶應義塾大学 出塚 拓巳)